

豊橋中部教会 60 年略史

(1) 講義所としての教会の誕生(米国南長老派教誨の伝道地として宣教し指導の許)

※1896年(明治29年)9月13日13日・・・豊橋湊町に旧日本基督教会の講義所設立。

(豊橋市内のハリストス正教会より20年遅れ、旧メソジスト教会より11年おくれ、聖公同時代頃)、

※(世相は、鹿鳴館の欧化心酔時代から一転して反動国粹謳歌時代に一変し、封建的社会へと逆戻りして、伝道の困難・不振の荒波をまともに受ける時代であった)

最初に開拓の任に当たられたのは、当時岡崎在住のフルトン宣教師、協力者、加藤寅彦(明治29~30年)。※明治40年頃、長尾巻師が旭幼稚園を創立(会堂兼牧師館の借家を改造して造られたもので、日曜学校の延長としての幼稚園の設立)

(2) 伝道教会としての教会

大正14年に辻 徳兵衛師が来任され、昭和9年に挙母教会に転任されるまで、10年間、伝道・牧会に専念された。その際、従来ミッションの指導管理体制から離れ、日本基督教会浪速中会に所属し、僅かではあるが、援助を受ける教会となった。

昭和3年には、老マカルビン宣教師来任、同師により、新しく昭和5年に間借りの旭幼稚園ではなく、固有の園舎(市内前畑町の市電停留所近くの東北裏側に150坪借地としてのこじんまりした園舎)を与えられ、昭和9年には辻師に代わり聴浪誠夫師受け継がれたが、昭和13年の支那事変以後、旭幼稚園はミッションの手から離れ、教会の管理に委ねられた。

(3) 昭和16年(1941~45)第2次戦争時代の教会、日本の教会は合同という大きい問題に直面する。旧日本基督教会は、一応40有余の他教派と共に解消して、新たに日本基督教団という合同教会が誕生、従来の日本基督豊橋教会改め、日本基督教団豊橋旭町教会という名称、新組織に入った。更に従来の南長老派の指導の許にあった豊橋市内東八丁の町の朝鮮教会が維持できなくなり、豊橋旭町教会との話し合いで、両教会の合同することに成り、教会は伝道教会からはじめて完全な自給独立教会となるが、聞こえがいいが、青年達は応召し、老人達は疎開していなくなり、山田 牧師は戦争に入る最も厳しい試練の時代に来任されたが、昭和18年には、豊橋旭町教会を去り、半杭師が就任するが、昭和19年にはその半杭牧師も代わりの牧師もなく、頼りの長老も仕事の関係で転任、日本人は僅かの婦人と僅かの朝鮮人達の状態となったといった厳しい状況の中で、岡崎教会牧師の宮田熊治師が終戦前後を兼牧され、月2回、礼拝指導に出張されたと記されている。

(4) 昭和20年は、この教会にとっても、最悪の年で、6月は会堂が町と共に消失、幼稚園も、一切の物的財産も、長い間の記録も全ては、風火と共に消えてしまったと、豊橋中部教会の60年略史に記されている。終戦と共に朝鮮人も去り、僅か数名の兄姉らが焼け残った家で、家庭集会を開き、来援の宮田熊治師の指導の許、かろうじて教会の存立をつなぐ状態であったと記されている。昭和22年、教会は、創立50周年を迎えたが、数名の信徒はこれを意識することすら忘れていた程、誰も疲労困憊の内であったという。この年に、岡本繁男師一家が満州から引き揚げ者として郷里豊橋に来着、無牧状態の教会のために意を決して、宮田熊治師からバトンを継承することになる。月2回の礼拝は合田初太郎宅(朝鮮からの引き揚げ者)で、毎週礼拝を復活し、牧師の謝礼は、月300円、一家は内職で支えられた。昭和24年、待望の教会堂が再建された。土地は、諸事情により、中柴町道六に移り、教団の建築委員会の配慮(米国世界方師団の援助)約100万円、当教会から60万円を工面することで建設が可能となる。

(5) 昭和29年3月には第2種教会から第1種教会になり、31年春にかけ岡本牧師は2年の病床生活に入られた。その間、教勢は衰えず31年には大隅敬三師を副牧師を迎えることになる。

『師を憶う』

近 藤 と よ

昭和十八年岡崎教会にご赴任になった宮田先生は、翌十九年には日本基督教会の代務者となられた。豊橋は前に十五師団があり、当時は十八聯隊の所在地として爆撃の目標とされていた。時おり大型爆弾が投下され危険率の多い軍都として、ご赴任下さる先生もなかった。けれど宮田先生は喜んで代務者をお受けくださった。

先生は岡崎教会の礼拝を終えて午後は豊橋の集会においで下さった。今のような特急電車はなく、各駅停車で空襲警報とともに電車はとまり、また解除とともに動き出すということで、時には停車時間が長く、そのようなときには下車して豊橋まで歩かれたこともあった。ご健康であったとはいえ六十才であられた先生には大へんなことであったと思う。だんだんと戦争もはげしくなって、その当時、ただ目の前の集会のことしか考えていなかった私どもは、先生のご来豊によって励まされ力づけられ、砂漠の中の真清水を見るような思いでした。

昭和二十年六月十九日の夜半、豊橋は空襲され少しを残して全焼した。教会も焼かれ幼稚園も焼かれ、生家もやかれ幼稚園の防空壕から友と二人で焼け残った品を出していた二十日の夜明けに、宮田先生ははや岡崎から駆けつけてくださって私どもが生きているのに「よかった」「よかった」を連発なさった。その1ヶ月後には岡崎が同じ運命にあい、早速お見舞いしたところ、幸いにも禍をのがれた正村様のお宅で礼拝が行われていた。そのような時でも豊橋の集会は休まれず豊橋にお供して集会に帰った。宮田先生は常に神の愛に応える姿勢を身をもって示された。

幸いにも豊橋生まれの岡本牧師が外地から帰郷され教会をご担当下さるまで、(二十二年十一月まで)教会のためにご尽力くださった。

豊橋中部教会六十周年略史の中に

第十六代 宮田熊治師

「厳密に言えば、定住牧師ではないから第十六代牧師とは言い得ぬかも知れぬが、教会の消滅の危機に際して、空襲前後の戦塵の中に散らされた小羊を求めてさ迷いめぐられ、定住者以上の労苦を重ねられた忘れられぬ先生である。明治学院出の古い先輩、現岡崎教会牧師であり、中部教区総会議長、同伝道部長など歴任の古兵者である。」と記されている。

いま宮田先生を偲ぶとき、わけもなく、目頭が熱くなり涙がにじむ。